

頭脳循環を活性化する若手研究者派遣プログラム パラオ共和国出張報告（平成 24 年 4 月 30 日～5 月 7 日）

出張者：水野一晴（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授）

出張期間：2012 年 4 月 30 日～5 月 7 日

出張先：ベラウ国立博物館

出張報告：

ベラウ国立博物館を訪問し、館長のオリンピア・モーレイ（Olimpia Morei）氏と会い、「頭脳循環」で博物館に派遣されている紺屋あかりさんの受け入れに関し話し合った。また、彼女の今後の研究計画について話し合った。5 月 4 日はパラオの敬老の日で祭日であり、紺屋さんとコロールのシニアシチズンセンターを訪れ、インフォーマントの Antonina Antonio さんらの老人会の式典に参加し、パラオの伝統的な踊りや歌を鑑賞した。10 名ほどの高齢者が表彰を受けていたが、そのとき呼ばれていたパラオ人高齢者の名前の多くが日本名であったのには驚かされた（ハルコ、アケミ、ヒサエ、キクエ・・・）。

パラオには第一子が誕生すると親族や近隣の人々を招いて祝うベビーシャワー（ンガッサ Ngasech）という伝統的な儀式があるが、それに参加して儀式を観察した。

アイメリーク州を訪問し、アイメリーク州政府の観光計画コーディネーターの Lelly E.Obakerbau 氏の案内で「バイ（アバイ）」と「ケズ」を観察した。バイ（アバイ）はかつて母系社会であったパラオにおいて男性の社交の場であり、各氏族が話し合いをし、老人が少年への伝統を継承する場所でもあった。ケズは山を削って段々状の形を作ったもので、伝統的にタロイモを神に捧げる場所とされている。

日本パラオ友好団体協議会会員の佐藤百合昭氏にパラオの日本統治時代の遺跡を案内して頂いた。電信塔と電信のための発電所および発電機はそのままの形で残っていた。佐藤氏は大正 10 年から昭和 20 年当時のコロール市街図を作成され、その市街図には店の 1 軒 1 軒にわたって店名が記され、当時のコロール市街地はほとんど日本人商店で埋め尽くされているのがよくわかった。佐藤氏とはパラオ小松ファーム（熱帯果樹園）を訪れ、小松夫人にバナナ、パパイヤ、ササップ、スターフルーツなどの熱帯性果樹の生態を説明して頂いた。また、養殖所も訪れ、パラオの養殖の現状を観察した。

紺屋さんとは島を巡り、火山島と珊瑚礁島の違いや、珊瑚礁の裾礁、堡礁、環礁の形成の変化やその地形、土壌の発達などについて説明をした。また、途中で見かけたアニミズムの儀礼の跡地と思われる場所についてその可能性を示唆した。



写真 1 敬老の日に行われた式典でのパラオの伝統的なダンス



写真 2 アイメリーク州にある「バイ (アバイ)」。建物は岩の土台の上に釘やネジを使用せずに建てられ、外壁や内部の梁などに装飾が施されている。



写真 3 アイメリーク州にある「ケズ」。段上には「ブックル」と呼ばれる高さ 4・5m の膨らみがある。



写真4 第一子を祝う儀式ベ
ビーシャワー（ンガッサ
Ngasech）（コロールにて）



写真5 第二次世界大戦時に
日本軍の電信のために使用
された発電機



写真6 パラオ小松ファーム
（熱帯果樹園）に植えられて
いるパイナップル



写真 7 パラオに見られる養殖所